県立大学設立委員会（第７回）

１　日　時：平成 28 年６月 15 日（水）　午前 10 時 15 分～12 時 15 分

２　場　所：長野県庁 議会棟３階 第１特別会議室

３　出席者

委員：安藤国威委員長、金田一真澄副委員長、徳永保副委員長、内堀繁利委員、
太田光洋委員、笠原賀子委員、上條宏之委員、森本博行委員、山浦愛幸委員

事務局：総務部県立大学設立担当部長 高田幸生
総務部県立大学設立準備課長 宮原　茂　ほか

（事務局）

皆様、本日はお忙しい中、県立大学設立委員会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

開会前ではございますが､お手元にお配りしております会議資料の確認を始めにお願いしたいかと思います。

配布資料でございますが、次第、それから委員の名簿、それから設置要綱、その後資料１といたしまして、前回第６回の委員会から本日までの準備の状況について、それから資料２といたしまして、グローバルマネジメント学科のコース編成の見直しについて、資料３が海外プログラムについて、資料４、専任教員の選考状況について、資料５が、30 年度の入学者選抜の概要について、それから資料６が、アンケート調査結果について、それから資料７が一番後でございますが、施設整備についてということで、以上の資料でございますが、何か不足の資料とかございますでしょうか。もしありましたら、お手を挙げていただければ事務局のほうでお持ちいたしますが。よろしいでしょうか。

また、本日のこの委員会は公開で開会させていただきます。委員の皆さまの発言の内容につきましては、後日確認をさせていただいて、議事録として県のホームページのほうで掲載をさせていただきたいと思いますので、ご了承いただきたいと思います。

ただ今から、第７回県立大学設立委員会を開会させていただきます。私、しばらくの間、進行役を務めさせていただきます、この４月から参りました、県立大学設立準備課の小野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、長野県総務部県立大学設立担当部長の高田幸生より、ごあいさつ申し上げます。

（高田担当部長）

皆様、おはようございます。県立大学設立担当部長の高田でございます。本日は委員の皆様方、それぞれお忙しい中を県立大学設立委員会にご出席いただきまして、ありがとうございます。今回は 28 年度に入りまして最初の委員会となりますが、引き続きよろしくお願い申し上げます。

議事に先立ちまして、これまでの経過を簡単に申し上げます。教育課程の編成、入学者選抜等については、各専門部会におきまして、細部にわたる検討を進め、内容を固めてきていただいております。また教員候補者の選考も、精力的に進めておりまして、候補者としてお願いする先生方にはカリキュラムの検討や、シラバスの準備等を順次お願いをしております。

また海外プログラムの実施に向けまして、学生の受け入れ先の開拓等にも熱心に取り組んでいただいております。専門部会の委員をはじめ、関係の皆様のご尽力に対しまして、この場を借りましてあらためてお礼を申し上げます。

同時に 10 月の文部科学省への大学設置認可申請に向けましては、準備作業をさらに加速する必要がございますので、引き続きご協力・ご指導を賜りたいというふうにお願いをいたすところでございます。

なお、これまでの検討状況等につきましては、後ほど事務局からご説明を申し上げます。それから施設整備の関係でございますが、去る４月９日に金田一学長予定者、そして阿部知事も出席いたしまして、三輪キャンパスの起工式を行いました。現在校舎の建設を進めておりますが、県短期大学の授業を行っている中での工事であり、短期大学や周辺住民の皆様にはご不便・ご迷惑をお掛けしております。来月着工予定の後町キャンパスも併せまして施工管理を行っている県の建設部と連絡を取りながら、安全を最優先に大きな支障等が生じないよう配慮しながら進めてまいりたいと考えております。今後も委員の皆様からご指導をいただきながら、平成 30 年４月の開学に向けて準備を進めてまいりたいと考えております。

以上、簡単でございますが開会にあたってのあいさつとさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

（事務局）

ありがとうございました。続きまして、恐れ入りますが、安藤委員長様からごあいさつをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（安藤委員長）

委員長の安藤でございます。本日は大変お忙しい中を、本委員会にご出席いただきまして、本当にありがとうございます。

さて今、全国で地方創生に向けまして、産学官一体となった取り組みが活発に行われつつありますけど、私はかねてから長野県が地方創生の一つのモデルをつくるべきでないかということを、僭越ながら知事はじめ、県のほうに申し上げておりました。特に産学官の連携と

いうことにつきましては、大学の果たすべき役割というのが非常に大きいものだというふうに考えております。

実は先週１週間、米国へ出張する機会がありまして、特にシカゴに、ノースウェスタン大学という大学がありまして、そこにケロッグビジネススクール、そこの主催している、ケロッググローバルイノベーションネットワーク 2016 というようなコンファレンスに参画をしてまいりました。その帰りに、コロラド州のデンバーに参りまして、デンバーというのは、コロラドイノベーションサミットというのを州の知事の指導力の下に、盛んにやっているところなのですけど、そこの州の方々と意見交換をしてまいりました。同時にコロラド州立大学も訪問してきたわけですけど、この二つへ行って、非常に強く感じましたことは、一つにやはり大学と州と地域、そしてまた企業が一体となって、いかにして新たな環境の変化に対して対応していくのかということを、真剣に議論しておりまして、社会的な課題を解決するためにどうすべきかということを、真剣に取り組んでおりまして、その実態をいろいろと感じることができました。

ご承知のように今、第４次産業革命というふうに呼ばれていまして、非常に環境が激変しているわけでございますけど、そういう中で新しい県立大学の役割ということを考えてみますと、もっともっとこれからは他の信州大学はじめ、県内の大学とも協力をしながら、先ほど申しました長野県の地方創生ということを実現していくためには、どのような役割を果たしていくべきかということについては、非常に大きな今回、機会だと思っておりますので、これからの大学をさらに、開学まで、そして開学後もその役割を果たすべく努力していきたいというふうに感じた次第でございます。

もう一つ入れさせていただきますと、実は大学の準備という面につきましては、今までグローバルマネジメント学部というのは、健康発達学部に比べて、準備もなかなか遅れているところもあったのですけど、ここへ来て、今までの理論的なこととかコンセプトを語るところから、いよいよ本格的にどういうふうに具体的なプログラムにそれを落としていって実現していくかということを、金田一学長予定者以下、中核教員の方々大変熱心で、週末もつぶしながら、相当精力的に熱意を持って議論をしていただいております。

特にその中で、本学の特長であります、例えば海外プログラムですとか、あるいは全寮制ですとか、そういう面におきましても本当にどうあるべきかということを、かなり突っ込んで議論しております。その中で、本当にわが校の魅力というかユニークな点が、どんどん明確になりつつあるなと。

今日も実はその中で幾つかご説明があるかと思いますけど、ぜひその辺の進捗も委員の皆様方に感じていただいて、特にこのような精力的に参画していただいている中核教員の方々が大変優秀な方々が集まっておられるということを感じておりますし、それからまた先生方の努力に対しても、この機会に心から感謝をしたいというふうに思っております。

ということで、いよいよ大学の開学まで余すところ１年半というふうなところまで来ております。最後の準備を詰めていく大事な時期に差し掛かっておりますので、ぜひこれからも

関係者の皆様方と議論をしながら、私も最大限の努力を図って努めてまいりたいと思っております。

ということで、簡単ですけど、あいさつに代えさせていただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

（事務局）

ありがとうございました。なお、本日は上野委員さん、濱田委員さん、山内委員さん、それからオブザーバーとして参加していただいております、長野市の黒田副市長さん、ご都合によりご欠席されておりますので、ご報告いたします。

本日は本年度に入って初めての委員会でございますので、お手元に委嘱状を置かせていただきましたので、お納めいただきたいと思います。それから本年度から首都大学東京の森本名誉教授さんも、この委員会に加わっていただくことになりました。森本先生、恐縮ではございますが、一言ごあいさつをお願いしたいと思います。

（森本委員）

首都大学東京の森本と申します。よろしくお願いいたします。私、企業に 30 年、大学に 10 年おりまして、残りの 10 年はこの首都大学東京のほうでですね。そこの間８年間も大学基準協会等の大学認証評価に関わっておりました。そういうことで、そういう経験を生かして、この大学が優秀な大学になるように努力したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（事務局）

ありがとうございました。なお、事務局関係といたしまして、県立大学設立準備課長の宮原以下職員が後ろのほうで参加させていただきますので、よろしくお願いしたいかと思います。

それではこれから議事のほうに入っていただきますが、これ以降の進行を、安藤委員長様によろしくお願いいたしたいと思います。お願いいたします。

（安藤委員長）

それでは議事に入らせていただきたいと思います。まず次第の１、第６回県立大学設立委員会以降の準備状況等につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

（宮原課長）

おはようございます。この４月１日付けで県立大学設立準備課長を命ぜられました、宮原茂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは資料１をご覧いただきたいと思います。前回３月 14 日に開催をいたしました、

第６回の県立大学設立委員会以降の準備状況等について、ご報告を申し上げます。

まず、専門部会の開催状況でございます。先ほども安藤委員長からお話がございましたとおり、現在教員予定者の皆様方には、カリキュラムの編成等、学部・学科ごとに打ち合わせを行っていただいておりまして、そうしたものを踏まえて、教育課程・教員選考専門部会につきましては、去る６月６日に開催をさせていただいております。ご審議いただいた事項については、この後の議題でご報告をさせていただきたいと思っております。

今後、本年 10 月に予定をしております、文部科学省への大学設置認可申請に向けて、カリキュラムの編成等について、さらに検討を進めてまいります。また入学者選抜専門部会も同日開催をさせていただきました。こちらもご審議いただいた事項については、この後ご報告をさせていただきます。

次に高等学校等への説明状況でございます。高等学校の校長会等の場にお伺いをいたしまして、入学者選抜や、高校と大学との接続といった課題について、意見交換をさせていただいたり、高等学校から説明や模擬授業等のご依頼があったものについては、金田一学長予定者をはじめ、現在設立準備にお力を貸していただいている先生方にもお願いをいたしまして、お引き受けをしてご説明に伺っているところでございます。

次に地域住民・企業等への説明状況でございます。三輪キャンパスにつきましては、これまでも基本設計、実施設計等、節目、節目に住民の皆様に対する説明会等行わせていただきました。建築工事の着手に先立ち、施工業者の方と共に、周辺住民の皆様を対象とした工事説明会を３月に開催をさせていただいたところでございます。

また、学生寮や地域連携施設を建設予定の後町キャンパスの周辺地域にあたります、長野市第４地区の役員の皆様とは、意見交換等を実施させていただいております。市街地に、若い学生さんが 240 人といった規模で暮らすことになるということで、地元の役員の皆様も、受け入れの準備ですとか、さまざまな学生と地域の交流のアイデアを考えていただいているところと伺っております。後ほどご説明をいたしますが、この後町キャンパスも来月には、着工の予定でございまして、施工業者の方と共に、工事説明会等を開催する予定にしてございます。

また、安藤委員長には、県内企業等をご訪問いただく等、経営者の皆様とも意見交換を実施していただいているところでございます。

経過説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

（安藤委員長）

どうもありがとうございました。それでは金田一先生から何か補足事項があれば、この機会に。

（金田一副委員長）

今日は、貴重な時間を割いて、ご出席頂きましてありがとうございます。ただ今、宮原課

長のほうから説明があったとおりでございます。10 月に向けてこれから設置審を通していかなくてはいけないということで、今、着々と準備を進めているところでございます。それにつきましては、先ほど安藤理事長からもございましたけれど、理事長そして学長そして先生方、そして県の職員が一体となって今、準備を進めているところでございます。一部で、いろいろ予想も付かないこともございましたけど、でも基本的には全てうまくいっていると思います。あとは、むしろこれから高校回りを私がどんどん行って、いかにこの素晴らしい大学を、各高校の先生方に知っていただくかということに、精力を尽くしたいなというふうに考えております。

ぜひ今日は皆様方にいろいろとご意見を伺いたいなと思ってきましたので、私のあいさつは以上で終わります。

（安藤委員長）

どうもありがとうございます。それでは委員の皆様からご意見あるいはご質問等いただきたいと思います。ぜひこの機会にいろいろ整理していただきたいと思いますけども。どなたか。

（上條委員）

資料２とも関わりますが、教育課程・教員専門部会の『グローバルマネジメント学科の「起業家コース」の検討』というのが、ちょっと中身が分かりませんので、次の資料 2 でご説明いただければいいかなと思います。

（安藤委員長）

はい、そこで詳しく説明があるかと思います。ということで、それでは次の議題に移らせていただきます。議事の２の『グローバルマネジメント学科のコース編成の見直しについて』議論いたしたいと思います。最初に事務局からご説明お願いします。

（宮原課長）

はい、それでは資料２グローバルマネジメント学科のコース編成の見直しについて（案）ということでございます。先ほどもお話ございましたとおり、現在教員予定者の皆様方に、カリキュラムについての具体的な検討に入っていただいております。その一端としてご紹介をするものでございます。

新県立大学の基本構想におきましては、資料の冒頭にもございますが、教育目標として、『ビジネスや NPO を自ら起業し地域に貢献できる人材』、あるいは『組織内で新たな取組に挑戦できる人材』というのを例に挙げて教育目標として掲げてございましたが、この基本構想の段階では、コース編成としましては、世界市場を視野に新たなビジネスを生み出すような人材を育成する、グローバル・ビジネスコース、それから政策立案や公共的なサービスの

担い手を育成する公共経営コース、この２コースの設定を想定しておりました。

この基本構想をベースに現在、どのような入学者を選抜して、その方たちにどんなカリキュラムにより教育を行って、どのような資質を持った人材を送り出していくのかという点について、教員候補者の皆様に、より具体的な検討を進めていただいております。

その過程で、社会的課題等に取り組む新たな事業を創造できる人材を育成するソーシャル・アントレプレナーコースを新設して、学科全体では３コースにするという方針が出てまいりました。対象者になります学生さんの人数は必ずしも多くないかもしれませんけど、将来新たな事業やNPO等を起こそうというような思考を持った、言ってみれば少し尖ったバイタリティーの溢れた学生さんにソーシャルビジネスですとか、起業に関するカリキュラム等を中心に学んでいただいて、社会的な課題に対して、新しいアイデア、新しい手法で持続的に取り組んでいただけるような、そういった人材を育成したいというような議論でございます。

その場合、このコースの選択というのは、１年生から２年生になる際に選択をいただくわけですが、こういったコースとして一つの独立のコースとして、学生さんに提示をいたしまして、それの目的に沿ったカリキュラムの整備をして、この学科の持つ特長の一つとして、明確化したほうが良いのではないかという提案でございます。

このコースの名称につきましては、先日の教育課程・教員選考専門部会では起業家コースとしてございましたが、起こす業の起業家ということですと、この学科で考えている人材像よりやや狭いのかなと。いわゆるベンチャービジネスを思考する学生だけではなくて、NPOを立ち上げようとする学生でありますとか、家業を継ぐ方、あるいは既存の組織の中で新たな事業を企画しようとする方、そういった方々を含めて考えてまいりたい。

そうしますとやはり、ソーシャル・アントレプレナーという日本語では、例えば社会的企業家、企てる業のほうでございますが、社会的企業家等と訳される場合もあるようですが、なかなかしっくりする訳語が必ずしも定着しておりませんので、そのままソーシャル・アントレプレナーコースという名称がふさわしいのではないかという議論が、あらためて先生方の間でございまして、副委員長の金田一先生、安藤委員長にもご相談をさせていただきまして、本日はこのような名称で提案をさせていただいているところでございます。

ご承認をいただければ、10 月に予定しております大学設置認可申請に向けて、３コースそれぞれについて育成する人材像、カリキュラムの内容等さらに具体化して、多様な学生にこの学科を選んでいただけるよう、準備を進めてまいりたいと考えております。説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いします。

（安藤委員長）

ありがとうございました。今、宮原課長からご説明ありましたように、グローバルマネジメント学科のコース編成につきましては、先日の６月６日の教育課程・教員選考専門部会で議論をしていただきまして、今日のような結果になっているわけでございますけど、これに

参加されておられた森本先生のほうから、補足がありましたらよろしくお願いします。

（森本委員）

ソーシャル・アントレプレナーと申しますと、社会的課題に対して、ビジネスということでその課題の解決を図るわけです。それは日本だけではなく、例えば発展途上国の問題等も全てその社会的課題になるわけであります。

例えば、一番有名なのはバングラデシュのグラミン銀行がマイクロファイナンスを行ったり、そういう貧困層に対してどのような金融サービスを行うかというのもありますし、国内で言えば、全ての社会的課題を行政サービスで賄うと大変な高コストになります。行政サービスではなくて、事業としてやるということも当然考えられるわけですね。そういう意味で、事業として社会的課題の解決を図るという意味で、このソーシャル・アントレプレナーというのを前面に出しまして、一つのこの大学の特長とさせていただいたわけであります。よろしくお願いいたします。

（安藤委員長）

どうもありがとうございます。これに関しまして、どなたかご質問があればぜひお願いします。はい、山浦委員ぜひお願いいたします。

（山浦委員）

ソーシャルを取ったほうがいいのではないですかね。起業のやっぱりアントレプレナーというのも重要なので、同じ精神なのかなというふうに思っていまして、ソーシャルと付けて、おっしゃるとおりまさにそういう公共に関することに限られると困る、この説明も社会的課題とこうなっているのですが。

やはり起業家精神は、いわゆるビジネスの世界にも非常に必要になってきておりまして、私も、人数はどの程度、170 名のうちどの程度想定されているのか、ちょっとよく分かりません。私は最低 50 人ぐらいの定員をもらって、このコースいってもらって、くらいかな。初めて聞いたものですから全然どのぐらい想定されているのか全く分からないですけれども。そのぐらいのコースというのではないかと私は思っていて。公共経営っていうのはどういうことか分かりませんが、これとも近いような、この中に半分ぐらい属するのかなと、この説明だと思うよね。どう思います？上と下のこの中間的な世界と思うので。そうすると、ソーシャルというのは付けないで、アントレプレナーシップとかなんか、そういうコンセプトにしたらいいのではないかなというふうに思ったりするのですけど、いかがでしょうか。

（安藤委員長）

どうもありがとうございます。アントレプレナーということについては、企業代表として全面的に強くご賛同いただけたというご理解かと思っています。それで実は、議論の中で森

本先生にも後で回答していただきますけど、これをあえて分けるべきか、あるいはむしろグローバル・ビジネスに包括されるのではないかというふうな議論もされました。

それで私どもの理解は、ここに“ぽつ”が入っていますけど、ソーシャル・アントレプレナーコースいうことですね。今、山浦委員のおっしゃった、起業における非常に強いいわゆる起こす方の起業、アントレプレナーっていうのは、そこに当然含まれるので、しかしさらにもう少し幅を広げるというので、ソーシャルを加えようというので、最後にというか、という意味で捉えたわけでございます。私はそう理解しているのですけども。

（徳永副委員長）

安藤委員長のような説明だと非常に分かりやすいのですけれど、若干、委員長おっしゃったような説明でも、ちょっとこの記述なのですね。ここには目的として、ビジネスの手法を用いて社会的課題の解決に持続的に取り組む事業を創造できるというふうに、極めて社会的な課題だけのほうに置いているわけですね。ですからここのところが今の“ぽつ”というようなことにはちょっと取れませんで、どうしてもこれはあくまでもビジネスの手法だけ使っているのであって、あくまでも公共的な課題の解決が手段ということになりますので、やっぱり説明については、やはりそれは逆に言うと、私なんかは社会や地域の問題意識を持ちつつも、やっぱり起業家精神なので、そこはやはりもちろんずっと３年も前の議論の中でも、例えばバングラデシュの関係の方にも来ていただいて、議論していましたから、そういう要素があってもいいとは思いますけど、やはりそこは大事なことは、県の中のビジネスを支えていく人材なので、そうなってくるともうちょっと説明として、いわばソーシャル的な課題に取り組むということも一つだけど、もう一方のやっぱりそれは事業そのものを盛んにして、目的としては県の産業発展に資するということをきちっと明確にすべきだと思いますけど、いかがでしょう。

（安藤委員長）

ありがとうございます。宮原課長、説明をお願いします。

（宮原課長）

すみません、ちょっと事務的なご説明だけちょっと簡単に。実はアントレプレナーシップ論というような授業も予定をしてございます。これはまさにソーシャルだけに限らず、起業家精神といったようなものも学んでいただくような科目でございますが、これは学部の学生全員に共通で学んでいただくようなカリキュラムを今、検討してございます。そういう意味ではご指摘のような、アントレプレナー自体に対する教育というのは、学科全体で力を入れて、むしろ基礎的に必須として行っていくという中で、各コースに反映していきたいというふうなところがございますので、ちょっと補足をさせていただきます。

（安藤委員長）
ありがとうございました。上條委員。

（上條委員）
前々からグローバル・ビジネスコースというものも含めまして、ちょっと気がかりなところもあったわけですが、これは後で説明があると思いますけど、『新県立大学設置に関するアンケート調査結果』の２ページの上の段を見ますと、このときは総合マネジメント学部総合マネジメント学科でアンケートとったと思いますけど、県内高校１年生で、この学部学科に関する理解が非常に行き届いていないと言いますか、そういう気がするのですよ。グローバル・ビジネスコースというものの本来的なその役割というのは、既にいろんな所で説明されているわけですが、言うならばグローバリズムとその地域を掘りさげたローカリティと言いますかそういう立場から、グローバルなものをどういうふうにきちんと理解していくかという、そういうことだと思うのですけどもね。ただグローバル・ビジネスというそういう名称ですと、その地域に立脚したというところがなかなか見えにくいと、高校生には見えにくい。ですからその辺のところがなかなか今、理解が行き届いていない、そういうことだと思うのですね。
それとさらにアントレプレナーというものが出てきたときに、この言葉の持つ、なんと言いますか、理解度というのはさらに私は困難になるのではないかというふうに実は思っているわけです。
要するにこれは 18 歳人口だけを対象にしたものではないと思いますけど、前回も濱田委員のほうからもお話がありましたけど、法人化して県から離れるとは言ってもやっぱり地域の大学ですので、地域にどう立脚して世界を見るかというふうなところがもう少しきちっと見えないと、この高校生、あるいは県民の理解が進まないのではないか。
私自身の感じでは、要するに企業というものが、長野県の場合、製糸業も含めて幾つかの企業というものが精神的に残ってきた事例があるのですけど、これはこれなりの一つの歴史的な法則がありまして、どちらかと言うと、県民性というのは堅実なものを指向する性格が強いと。そういうようなことも全て含めて言いますと、この横文字で表現したものの、中身をきちっと理解させてそれに対応するカリキュラム、それから三つのポリシーを、明確に示していかないと宙に浮くのではないかという、そういう心配をしております。

（安藤委員長）
はい、どうもありがとうございました。それでは各委員のご意見に対して金田一先生どうですか。

（金田一副委員長）
これは進め方については、やはりマネジメント学部の進め方を尊重したいと考えておりま

す。ただ、僕のほうから方法論として、こういうことが可能かどうかということを申し上げたいと思います。なかなかこのアントレプレナー思考を持っている人を育てるってすごく難しいことです、大学で。うちではそれができるのかということのほうを、僕はむしろ考えるのが私の役割かなと思いました。そこで私が考えたのは、つまりこの新大学では、１年次から実はゼミがございます。専門ゼミは２年からスタートいたしますけど、１年次から入門ゼミはございます。私はそういうところで先生と学生が近い関係で、より実践的な教育をするということがうちの大学は可能ではないかと思います。

であれば、その実践的な教育をするということの中に、このアントレプレナーというこういったコースがあると、それはある程度充実した教育ができるのではないか。ただ、これは多分４年間の教育だけでは駄目だという説もありまして、できたら僕は、入試から例えば自己推薦の中でそういう人も採るようなぐらいのことをやらないと、そういうコースをつくってもなかなかそういう学生が実際に卒業できるかというと難しいのではないかと思います。

ですので、今、ゼミを、かなり専門ゼミをきちっとやる。先生が１年次から社会性や何かを身に付けて、社会へ出て、一体現場がどうなっているかということを見せながらやっていく。そういう実践的な授業をぜひうちの大学は進めていったら、他の大学にない教育ができるのではないか。これは SFC なんか割とゼミを１年次からやっているし、武蔵大学もやっていますけど、それは非常にむしろ評価が高い面があるかと。

そういう意味で、うちの大学で、このアントレプレナーコースというのは決して無謀なことではなく、むしろうちの大学だからこそできるコースではないかということを考えて、一応賛同しているところでございます。

（安藤委員長）

どうもありがとうございます。私のほうからも付け加えさせていただきますと、まず徳永副委員長の言われました、これがソーシャル・アントレプレナーと一言で言ってしまいますと、確かに社会企業家的な、社会のほうがメインになっているような印象を与えるかもしれませんけども。

先ほどもちょっと言いましたように、これ“ぽつ”を入れて、私どもは、グローバルマネジメントの中のコアは、アントレプレナーシップであると。それがイノベーションの源泉なのだというふうな大きな考えに基づきまして、そういう点で、ソーシャルという幅広い意味を付けましたけども、そこに“ぽつ”をきちっと入れて、アントレプレナーシッププラスソーシャルな絡みを持った、それを幅広く受け入れてくるのだと、そういう考え方で今回はソーシャル・アントレプレナーコースというふうに決めさせていただきました。

それから地域のことについて、おっしゃるように県立大学ですので、地域に密着した大学ということは、これはもう私どもの設立として切っても切れないところなのですけど、私どもはむしろ、非常に色濃く反映するカリキュラムとか内容になっておりまして、例えばただ単に寮に象山寮と名を付けたのみならず、やはり象山学というものを全部の生徒が全てこれ

を教養の一部としてきちっと修学すると。地域に対する理解とかを兼ねて、そういった町、地域に役立つ人材という意味もここで伝統的に教えるというか、学んでいただくというふうなことも考えております。ですから、確かにこのグローバル化時代ですから、どうしても総合マネジメントからいろんな理由があって、これグローバルマネジメントに変えたわけですけど、たまたまカタカナが多くなっているのは、先ほど上條委員から指摘があることはよく理解できますけど、内容的には、むしろローカリゼーションというかそちらにも十分な配慮を基にできているというふうに私は理解しております。

（徳永副委員長）

でも、この説明はきちっと訂正すべきだと思いますけど、そこは金田一先生ですね、中で議論があったから変えないというのはちょっとどうかと思います。そこはやっぱり基本的に設置審で問題になるのは、具体的な社会ニーズが求められますので、逆にこの表現だったら本当に NPO に就職する人間って一体日本にどのくらいいるのかっていうことになっちゃって、それじゃあ正直言って、審査上問題になりますので、やっぱりそこは考え方として、この上のほうの四角の中はちゃんと書いてあるわけですよね。『ビジネスや NPO を自ら起業し地域に貢献できる人材』と。ただ、実はこの四角の中の文言とその下の説明が違うのですね。ここはだから、社会や地域に問題意識は持ちつつ、新たな事業機会を発見して起業できる人材。あるいはビジネスの手法をもってという形ですので、そうなってくると、そりゃ起業のニーズだと、日本中に、いや長野県内に何百人いるでしょうから、十分持続できますけど、逆にこの三つだと本当に長野県内で NPO に要する人材って 10 年間で何人いるのって言われて、ちょっと説明に苦慮してしまうと思います。

（安藤委員長）

分かりました。はい、内堀委員どうぞ。

（内堀委員）

この三つの組み立てを見たときにちょっと分かりにくいかなっていう感じがしました。否定しているわけではなくて、前にあったグローバル・ビジネスと公共経営っていう二つですと、例えばグローバル・ビジネスのほうはビジネスに関係するもので、公共経営のほうは地域課題の解決とか地域創生とか、あるいは行政的な、かなり明確に分かれていたように思います。

このアントレプレナーコースというのを設けるということ自体には、説明が明確になって実際に学生が選択できれば、こういうコースがあってもいいというふうに思うのですが、基本的には、今まであった二つのどちらのコースにしても、海外の大学の教授なんかが言う、どんどん新しい職業ができてくるとか、あるいはだんだん AI だとか機械に取って代わられるというようなことは、アメリカとかイギリスの大学の先生おっしゃっていますけど、もう

そういう時代に突入していると思いますので、どういう仕事を社会に出てやるにしても、アントレプレナーシップと言いますか、アントレプレナー的なアビリティというか、そういうものは持っていないと、これからは規定のものを身に付けて、それをただ社会に当てはまっていくっていうような発想では、恐らく仕事になっていかないだろうというふうに考えますので、このアントレプレナーコースが行うようなことが、ビジネスコースでも公共経営コースでも必要だというふうに理解していて、それがその一番上の教育目標の抜粋のこの所に書かれているという理解だったのですが、そのアントレプレナーは特化してここで一つ持ち出してくることによって、例えば中間的な、どっちに進んだらいいのっていうような学生が出てくるというか、そういう可能性が懸念されて、ですのでもし設けるのであれば、例えば、じゃあアントレプレナーコースはグローバル・ビジネスコースとどう違うのか、アントレプレナーコースは公共経営コースとどう違うのかというようなところを、より明確にしていくことが、設けるのであれば必要だろうなというふうに思いました。

（安藤委員長）
ありがとうございました。その辺の明確さというのはカリキュラムのところで大きく、その編成で変わってくると思いますけども、今日はこの議論については、金田一先生どうされますか。

（金田一副委員長）
今、いただいた議論やご意見を踏まえて、もっと分かりやすく変えたものを見せたいと思います。

（安藤理事長）
特に徳永副委員長が指摘したようにそこに矛盾があるようなので。

（金田一副委員長）
それは何とかしないといけませんね。

（安藤委員長）
そうですね、そこはうまく説明が付くようにということ、あと上條先生もそれから内堀委員も言われたように、学生から見ても分かりやすい形で明確にアントレプレナーコースが位置付けられるというふうに、用意していきたいということですね。

（金田一副委員長）
このコースを設けることには賛同していただけると。

（安藤理事長）

そうですね、これはかなりグローバルマネジメントコースとして強く学部の先生方と議論いたしまして、やはり明快に大学の特長を出す。それからやっぱり今、長野県が全国の平均よりも起業家が非常に少ないというか、これはもう数字が明確に出ているわけでして、もっとより強くアントレプレナーシップということを強く打ち出そうということが、大学の方針でもございますので、ぜひこれはコースとしてはきちっと置いておきたいというふうなことは強く思っております。

（森本委員）

ご意見を、まずグローバルということと、もう一つはソーシャルという二つのご意見を頂戴したのですけど、グローバルにつきましては前回もご説明があったかと思いますけど、長野県では８割の方が県外に出られるということで、この長野っていうところからグローバルを眺めようという、グローバルの視点を養成するというのが一つの大きな目的になっております。

それからソーシャルにつきましても、これは取るのはやぶさかではないのですけど、おっしゃっているように起業家コース、アントレプレナーを養成するコースとして、グローバルは普通、それなりの成績を取って大学に入る人間を対象として、将来ビジネスマンに育てることが目的なのですけど、実はその入試のほうで、後でご説明がありますけど、自己推薦だったり学校長推薦だったり、そういうそれまでにはない人材をこの大学に入れようとしています。

そういう人たちを生かして、そういうことをやりたい人たちや企業を起こしたい人たちを集めてきて、そこで一つの従来のカリキュラムとは違う、特別のカリキュラムを用意して、そこでアントレプレナーを養成しましょうということで、最初は地域創生学部、学科とかいろんな言い方があると思うのですけど、それは特色としてはつまらない、多くの大学が言っていると思うので、本学らしさということで、アントレプレナーということを前面に打ち出した次第であります。どうぞご理解のほど。ですからソーシャルについてはあらためて検討させていただきます。

（安藤委員長）

そうですね、どうもありがとうございました。ということで今回のこのソーシャル・アントレプレナーコースの位置付けと、それからコースそのものの名称につきましては、一応持ち帰ってもう一度検討するということでよろしくお願いいたします。各委員の皆様のご意見、本当にありがとうございました。

それでは続きまして、海外プログラムにつきまして、これは事務局から準備の状況についてご説明をお願いしたいと思います。

（宮原課長）

資料３『海外プログラムについて』でございます。グローバルな視野を持って地域に貢献する若者を育成するという観点から、全学生に参加をいただきます、海外プログラム。長野県立大学の特色の一つでございます。

目的にありますとおり、語学力の向上だけではなくて、むしろこれから深めようとしている専門分野を、海外の視点から見ることによって視野を広げていただく。あるいは日常とは異なる環境で体験をしていただくことによって、たくましさを獲得していただく。こういったところにも重点を置きまして担当の教員予定者の皆様には大変お骨折りをいただいておりまして、海外の大学との交渉等精力的に準備を行っていただいております。

１年次には全員が学生寮に入っていただき、まず親元から離れて自立した生活に馴染んでいただく。この海外プログラムに求められる語学力を想定した、週４回の１年次の英語の集中プログラムを受講いただく。こういったプログラム等と連動して、この教育上の特長となる取り組みを、効果的に実施してまいりたいということを検討していただいております。

その上で２年次に入りまして、派遣先に関する事前学習等行って、表の時期というところにございますが、６月から、学科によっては 11 月にかけて、ということになりますが、10 日から４週間といった期間でございますが、海外に派遣をしてまいります。派遣先、それからその期間に応じまして参加費は学生にご負担をいただきますが、できるだけ低廉な費用で本学の学生に応じた効果的なプログラムになるように、相手方の大学等との交渉を行っているところでございます。

派遣先のところでございますが、現在アジア、アメリカ、オセアニア、ヨーロッパ各方面で、全体として複数の大学等と交渉を行っておりまして、現地視察等も実施をしているところでございます。

先日、まず第１弾としまして、アメリカのミズーリ大学コロンビア校から長野県立大学の学生を受け入れるということについて、基本的な合意をいただいたところでございます。この他の候補につきましては、今ちょうど交渉の途中でございますので、具体的な大学名に関しては申し上げられませんが、グローバルマネジメント学部 170 名の学生には、それぞれの派遣先の希望を伺って、グループ分けをして派遣をするという方針としております。

食健康学科においては、わが国の管理栄養士制度に相当する資格職が幅広く活躍をされているような国、それからこども学科においては、保育幼児教育等の先進国を想定しまして準備を進めていただいております。

プログラムの内容でございますが、マネジメント学科の場合、語学プログラムだけではなくて、現地の大学におけるビジネスの専門分野のレクチャーを受講する、あるいは現地企業の視察ですとか職場体験、それから現地の学生との交流等を企画してございます。

食健康学科については、現地の管理栄養士に相当する資格職の活躍の状況、あるいは日本食を通じた現地の学生等との交流等を計画、またこども学科については、現地の保育園・幼稚園等の視察、体験等も計画をしているところでございます。

単なる短期の語学留学ではなく、この大学ならではのプログラムとなるように工夫をしていただいておりまして、さらにその後の長期の交換留学等に挑戦する学生が出てきていただけるように、引き続き準備を続けてまいりたいと思っております。説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いします。

（安藤委員長）

ありがとうございます。それでは委員の皆様から、ご意見等あるいはご質問等ありましたらば、よろしくお願いします。その前に、それでは金田一先生から何か補足、ございますか。

（金田一副委員長）

今、宮原課長のほうからご説明があったとおりでございます。やはり１年次に全寮制という制度がございますので、そこで自立性を養って、そして英語も週４回行った上で、この２年次に海外にいくということが非常に大きな意味を持つだろうというふうに考えております。

２年次のこの20歳前後の学生が海外を見るということは、大変大きな意味があるかと思います。その後、自分がどういう生き方をするか、どういう職業を持つかということについても、非常にそういうところでは大きな刺激を受けるのではないかというふうに考えております。ですので、短期であるということは逆に大きな意味があるだろうというふうに考えております。

その後も第２、第３のステップを用意しておりますので、そういう意味では割とスムーズに海外へという形を取れるのではないかというふうに考えてつくられたプログラムでございます。その点どうかご理解のほどよろしくお願いいたします。

（安藤委員長）

ありがとうございます。どなたかご質問はございませんか。

（徳永副委員長）

質問ですけど、これ海外プログラムは単位の中に入っているのでしたっけ、入ってないのですか。

（金田一副委員長）

入っています。

（徳永副委員長）

私どもの大学でも、トビタテジャパンとか、いろいろ学内資金でたくさん行かせましてですね、他の最近ですと行かせているのが３カ月です。３カ月行く前に、自分が向こうへ行っ

て何をするかっていうアイデアを考えさせて、戻って来た後は体験を発表させたのです。その帰ってきた学生の体験をレポートにさせて、それを学長以下の前で発表して、一人一人褒めて、ちゃんとしたレポートだったら単位をあげようみたいなのをしましたが。じゃあこれはもう初めから単位化しているのですね。レポートみたいなのは書かせるのですか。

（金田一副委員長）
はい。

（安藤委員長）
単位化するために事前学習でしたり、それから向こうへ留学して一旦帰ってから、また学習する。そういうふうにきちっとそれを全部通じて初めて単位が与えられるというふうになっておりますので。その事前に準備することも大きな勉強の一つだということでやっています。

特にこれはさっき派遣先について簡単に説明ありましたけど、中核教員の方々あるいは先生・職員の方と一緒になって、全てわれわれが選んだ幾つかの複数の派遣先ともう既に現地に行って、いろいろな話し合いを進めてきて、感触は非常にいいものを得ております。その中でこども学科として一緒に現地に行かれた太田先生、何かご意見等ありますか。

（太田委員）
ちょっとだけ具体的な話を。こども学科はフィンランドに学生を連れていこうということで。北欧型の幼児教育をということで、長野の自然保育とかをちょっと意識しまして、現地の公立、それから私立の保育施設、ヘルシンキ大学の幼児教育のところとか、保育士の職業学校というところ、保育士を出しているところなのですけど、日本でも厚労省がフィンランド方式の保育士養成を取り入れるという方針が最近出てきているので、そういったところでも学ぶということは多いかなというふうに思っていまして。40 名を連れていって、それぞれグループに分けて２週間程度で異文化体験も含めて行いたいというふうに考えているところです。簡単ですけど、概要の紹介です。

（安藤委員長）
どうもありがとうございました。それでは笠原先生、食健康学科のプログラムについて何か補足することがあれば。

（笠原委員）
短大の中澤先生に直接現地に行って打ち合わせをしてきていただきました。管理栄養士のコースのほうは、大体日本の 20 年ぐらい先をアメリカの RD、レジスタード・ダイエティシャンと呼ばれる人たちは、進んでいるというふうに今まで言われておったのですが、そうい

った活躍されているアメリカの管理栄養士の実態を見てくることによって、これからの日本の栄養士の新たな可能性をしっかりと認識してもらって、これからその後の学びの動機付けを高めていければいいと思いますのが一点。

それからもう一点は、下のほうにも書いてあるのですが、今、日本の和食というものが世界的にも非常に認知されてまいりまして、アメリカでどのように和食が普及されてきているのかというようなことも、実態を踏まえながら、あらためて日本食、日本の良さというものを、長野県の長寿につながる食の豊かさといったようなものも、あらためて認識する場になってくれればいいというふうに考えております。

（安藤委員長）

どうもありがとうございました。ということで、海外プログラムにつきましては、引き続き海外での現地視察等の状況を踏まえながら、さらに確定したものにしていきたいというふうに思っております。この方向で準備を進めていくことにつきまして、委員の皆様から特にこれは修正したほうがいいとか、ご意見があればいただきたいと思います。なければこのまま続けさせていただくことになると思います。よろしいでしょうか。どうもありがとうございます。

それでは次の議題に移らせていただきます。次は議題の４の『教員の選考状況について』でございます。まず事務局のほうから資料の説明をお願いいたします。

（宮原課長）

資料４、『長野県立大学の専任教員等の選考状況について』、簡単ではございますがご説明を申し上げたいと思います。基本方針といたしまして、専任教員の総数は、学長を除き 79 名としてございますが、現在カリキュラムとそれから選考させていただいた先生方との関係等を勘案しますと、70 数名、70 名台前半くらいでスタートをできるのではないかというふうに考えている状況でございます。

具体の選考状況のほうですが、（１）として書いてございますとおり、県の短期大学からお移りいただく先生が 22 名、それから教育課程・教員選考専門部会の委員等によるご推薦をいただいた先生方が、現在 23 名。それから第１回、第２回、それから裏面に参りまして、第３回、第４回まで含めまして、公募により審査をさせていただいてお願いをしておりますのが、21 名の先生方。全体で、ちょっと数字出ておりませんが 66 名ほどまで固まりつつございます。全体とすれば９割程度が固まってきたところかなというふうに考えてございます。

選考によってお願いできることとなった先生方には、現在の勤務等々もある状況の中ではございますが、学部・学科別の打ち合わせにご参加をいただく等、新しい大学の設立準備に大変なご協力をいただいているところでございます。

今後７月末を目途に、残る専任教員の選考を進めていくとともに、この後、非常勤講師につきましても、近隣大学等のご協力もいただきながら、候補者を固めてまいりたいというふ

うに考えてございます。説明は以上でございます。よろしくお願いします。

（安藤委員長）
　どうもありがとうございました。今の説明につきまして、どなたかご意見等ございましたらば、受けたいと思います。はい、では、徳永先生。

（徳永副委員長）
　最近参加してなかったものですから忘れてしまったのですが、教授の方は別にして、准教授とか助教の方も全部初めからテニュアで採るのでしたっけ。テニュアトラック期間を置くのでしたっけ。

（宮原課長）
　移行期につきましては、ちょっと例外を設けてございまして、法人スタートして以降につきましては、テニュアトラックというようなことを考えてございます。

（安藤委員長）
　これにつきまして、どなたか補足説明、ありますか。各担当の委員の方は。金田一先生、特に何か話すことはないですか。

（金田一副委員長）
　一言だけ。公募いたしますと、他大学の専任の先生が応募してくるケースが大変多い、当然そういうことになるわけなのですけども。長野で、ぜひ教えたい、教育したいという先生が大変多いのです。もちろん面接をするわけですが、そこでうちの悪口を言うはずはないのですけど。それにしてもその本務校も素晴らしい大学で、そこでかなりの業績を上げている方がこちらに移るというケースがかなり見られます。
　私としては早くこの素晴らしい先生方を発表したいのでありますが、これは残念ながら来年までできないという状況で、これがとても残念なことですけど、大変素晴らしい先生方が集まっているということだけ報告させていただきたいと思います。

（安藤委員長）
　ありがとうございます。そうすると先ほどの宮原課長の説明ですと、79 名採用する予定のうち、66 名は今確保できている。その足りない 13 名も今、いろいろ進めていて、かなりの量が確定に近いところまで出ている感じですよね。
　ということで 10 月の設置審までにはきちんと耳をそろえてっていうか、全員そろえるということですよね。

（宮原課長）
間に合わなかったら大変ですから。

（安藤委員長）
大変ですよね。それはもういけるという前提で進められているということですよね。ありがとうございます。
それでは特に委員の方からご質問ないようでしたら、次に移らせていただきます。
議題の５の『入学者選抜の概要』について、まず前回からの変更点とか、まず事務局からご説明をお願いします。

（宮原課長）
それでは資料５をご覧いただきたいと思います。平成 30 年度の入学者選抜の概要案ということでございます。前回３月の設立委員会でご審議をいただいた際、さらに検討してまいりたいとして保留をいたしました幾つかの部分がございました。その点を含めましてご説明をさせていただきまして、ご承認が得られれば、高等学校の関係者、高校生等に周知をさせていただきたいというふうに考えているものでございます。若干細かい説明になりますが、資料をご覧いただきながらお願いをしたいと思います。
１の『入試区分』につきましては、前回３月のご説明と特に大きな変更はございません。大学入試センター試験と個別学力検査を組み合わせた一般選抜、それから学校長推薦選抜、自己推薦選抜、その他特別選抜を実施する予定ということでございます。
２の『入学定員、募集人員』でございます。一般選抜につきましては、国公立大学のいわゆる分離分割方式の前期日程、２月の下旬頃でございます。それから公立大学だけが利用できる中期日程、これは３月上旬になりますが、により実施する方針といたしたいと思ってございます。
グローバルマネジメント学部につきましては、国立大学との併願者等も想定をいたしまして、前期 70 人、中期 60 人と、中期のほうにも比重をかけてございます。健康発達学部については、学科全体の募集人員が比較的少ないこともございますので、第１志望の学生の受験が想定される前期試験に比重をかけることとしてございます。
前回もご説明をいたしましたとおり、県内高校生の進学先として一定程度確保する必要がございますので、いわゆる県内枠、下の※印の所に記載をしてございますが、県内枠を設けさせていただいて、学校長推薦選抜、それから自己推薦選抜、この枠を活用いたしまして全入学定員 240 人の２割程度、50 人前後になるかと思いますが、について県内高校生を優先して選抜をすることとしてございます。
３の『一般選抜』、受験科目等について、でございます。今回、前期日程、中期日程といった部分で、それぞれセンター試験と個別学力検査の科目等を整理させていただきました。
グローバルマネジメント学部につきましては、センター試験では前期も中期も共通で、ま

ず英語を必須といたしまして、国語、地歴・公民、数学、理科の４科目から３科目を選択していただきます。都合４科目の受験ということになります。

個別学力検査につきましては、前期日程では、英語を必須といたしまして、数学か小論文を選択できることにしております。

次のページに参りますが、この点が中期日程のほうでは、併願者ということも想定をいたしますので、個別学力検査のほうは、小論文のみの審査ということを想定してございます。健康発達学部の食健康学科につきましては、前期日程では国語、数学、理科、英語、これに小論文と面接で選抜をいたしますが、やはり併願者を想定いたします中期日程では、科目を絞りまして、国語、理科、英語に面接という形で実施をいたします。

こども学科につきましては、前期日程では５教科全て、それから小論文ということで選抜をいたしまして、やはり併願者が想定される中期日程につきましては、国語、英語の他、地歴・公民、数学、理科のうちから１科目として、計３科目のセンター試験と面接を実施する予定としてございます。

大きなくくりの４番、『学校長推薦選抜』でございます。前回お示ししたもの以降に修正追加をした点を中心にご説明をさせていただければと思っております。まず全体を通じまして、選抜方法の左側の欄でございますが、志望理由書等の書類審査を行う事項を明記させていただきました。グローバルマネジメント学部については、募集人員が 30 名というふうに多いこともございまして、また本学に適する生徒さんが、ある年同じ高校に複数名いらっしゃるという場合もあり得ますので、１校につき複数名の推薦もお受けすることとしたいというふうに考えております。

また調査書全体の評定平均の他に、この大学として英語を重視するという姿勢を示すために、英語の評定についても要件を追加することといたしました。

４ページをご覧いただきたいと思います。食健康学科につきましては、化学、生物を履修していることが必要となっておりますが、この点について、また高校の実際の履修の状況等を考慮して、①、②といった中期を加えてございます。

５番、『自己推薦選抜』についてご覧をいただければと思います。今回新たに選抜方法、出願要件等をお示しするものでございます。グローバルマネジメント学部では、書類審査、小論文、面接等を実施いたします。高校時代の活動ですとか、志望理由等を審査いたしますので、面接の際にはプレゼンテーションといった要素も加えていく予定でございます。先ほどの議題にも関連いたしますが、グローバルマネジメント学部においては、出願要件の所の最後に、将来、起業することに強い関心を持っている方にぜひ来ていただきたいということを、メッセージとして記載をさせていただいております。

それから食健康学科につきましては、全体の入学定員が 30 名ということで、限りがございますので、自己推薦選抜は実施をしないこととしております。５ページに参りまして、こども学科でございます。書類審査と面接で選抜を行ってまいる予定でございます。なお、この自己推薦選抜と学校長推薦選抜、先ほどの学校長推薦選抜は併願することはできないとい

う形にしてあります。

それから６番、『特別選抜』でございます。多様な背景を持った学生に学びの機会を提供するという主旨で、募集人員はいずれも若干名ではございますが、社会人選抜、帰国生選抜、それから私費留学生選抜を実施したいということでございます。

（１）の社会人選抜につきましては、入学時点で 23 歳以上、勤務経験が５年以上お有りの社会人の方を対象にセンター試験等を課さずに、書類審査、小論文、面接等による選抜を実施する予定でございます。志望理由書等の他に、入学後の英語集中プログラムですとか、海外プログラムにご参加いただくといった本学のカリキュラムの特色を踏まえて、英語については英検等の成績証明書を提出していただくことといたします。

またこども学科につきましては、勤務年数につきまして、家事従事期間というのを含めてございます。一度子育てをされた後に、あらためて幼児教育について学びたいというようなニーズも見られるということで、設けた規定でございます。

（２）の帰国生選抜でございます。外国で教育を受けてきた方のために、一般選抜を受験させるのではなくて、書類審査、小論文、面接で選抜を行うものでございます。出願要件の一番上の“ぽつ”の所で書いてございますのは、外国で 12 年の学校教育を受けられて、本学に入学する際に帰国しようとする方の要件でございます。その下に２点目の“ぽつ”に書いてございますのは、高校時代に既に帰国をされている方で、こちらは日本の高校を在籍期間が２年未満でなければいけないという形にしてございます。これは例えば、高校２年生の秋からとか、３年生になるときに帰国された方といった方が対象になります。それより前に帰国された方については、一般選抜をお受けいただくという形になろうかと思います。英語については、社会人選抜と同様の形を取らせていただいております。バカロレア等を取得されている方につきましては、先ほどお話を申し上げました、外国における学校教育に関する資格要件の有無にかかわらず、受験資格を認めることといたしまして、その成績についても選抜の参考とさせていただきたいというふうに考えています。

６ページをお開きいただきたいと思います。私費留学生選抜について、でございます。日本国籍を有しない方を対象としておりますので、日本留学試験を受験していることを条件としまして、その成績、それから志望理由書、小論文、面接等により選抜を行う予定でございます。

７としまして、編入学について記載をしてございます。本学は英語集中プログラム、海外プログラム等、特徴的なカリキュラム構成を取りますので、他大学からの編入学については、少なくとも開学から４年間は行わない方針で参りたいというふうに考えてございます。

また今回お示しをしておりますのは、平成 30 年度最初の入学者選抜について、でございます。平成 32 年度には、大学入試センター試験の改革を含めた大学入学者選抜改革もございますので、引き続き入学者選抜専門部会におきまして、２年目以降の入学者選抜について検討していきたいというふうに考えてございます。

今回、入試制度の概要を公表いたしますのは、高校生が志望校を検討し、受験の準備を進

めていただく上で、参考としていただきたいということの主旨でございます。配点等、さらに詳細な情報については、大学設置認可をいただいた後、入学者選抜の募集要項等として公表することを想定しております。説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

（安藤委員長）
　どうもありがとうございました。ただ今の説明につきまして、もし金田一先生から補足説明があればよろしくお願いします。

（金田一副委員長）
　この件につきましては、入学者選抜の専門部会で非常に精力的に何度も議論してきたことでございますが、入試に関しましては、いろいろなことが関わってまいりますので、まだ詰め足りないところがあるかと存じます。ぜひ皆様のご意見を伺いたいということでございます。

（安藤委員長）
　ということですので、内堀委員いかがでしょうか。もし高校生側から何かあればお願いします。

（内堀委員）
　いろんなことを申し上げてきましたけど、熱心にご検討いただいて大変感謝しております。ちょっと質問なのですけど、２番の『入学定員、募集人員』の所で、県内枠を設けていただいたわけですが、この全入学定員の２割程度とするということの意味は、最低限２割は確保しますよという意味なのか、県外枠も設けたいので２割を上限とするという意味なのか、要するに２割程度設けた後に、県内と県外の子どもを比べて、評価が県内のほうが高い場合にどうするのかということをお聞きしたいということです。
　それからもう一点は、２ページですか、下の２というふうになっている所の食健康学科の所ですけど、もしかしたら聞いたかもしれないです。前期と中期でセンター試験の科目が、一つ数学が減っていますが、国家試験とかそういうようなことをにらんだときに、影響があるのかないのか分からないのですけど、ここを前期と中期で必須の科目を変えたのはどうしてなのかということを、二つお聞きしたいと思います。

（安藤委員長）
　それでは最初のところの質問に金田一先生から。

（金田一副委員長）

一つ目の件につきましては私のほうからお答えしたいと思います。２割程度ということの意味なのですけど、大体の目安といたしましては、そこの表がありますけど、そこの学校長推薦選抜というのが上から 30 名、９名、12 名となっております。この最初の 30 名につきましては、大体 25 名程度をまず県内から、このグローバルマネジメント学部に関しましてですけど、を考えております。

それからその下の９名、12 名は完全に県内からということになっております。それから今度この 30 名から横にいきまして、自己推薦のところの 10 名というグローバルマネジメント学部の数字、これは、半分は県内からを想定しております。そういたしますと、大体 51 名、つまり自己推薦を含めますと 51 名ということになるかと思います。この数が 240 名の中の大体２割程度だろうということがこちらの想定でございます。ただ、その学校長推薦でもし、こちらが希望するような高校生が、もしこの数に足りなかった場合というようなことが万が一あった場合には、自己推薦でも当然そういうことがあり得るかもしれませんけど、もしそういうことが万が一あった場合には、一般選抜ですね、いわゆる２月、３月に行われます一般選抜のほうでその分を採るということになるかと思います。ですので、県内・県外に関しましては一応県内を優先して、大体今の人数を採るということでいきたいというのが、こちらからの一応想定しているところでございます。

２番目につきましては笠原先生にお願いできますか。

（笠原委員）

食健康学科のほうは、特に人数が少ないということで、いろいろと悩ましいところではありますが、中期日程で、できるだけ多くの生徒さんたちに受験の機会を与えるという方向性で、一応理科の科目を設けておりますので、理系のほうの勉強をされている方と、それから化学基礎、生物基礎ということで幅広く門戸を開いたということであります。

なるべく多くの生徒さんに受験していただく機会を設けるということが一つあります。管理栄養士の国家試験対策につきましては、入学後のフォロー等も含めまして十分に対応できると考えております。

（安藤委員長）

その前期と中期と、項目というか教科が違っていることについてはどういうことがという質問があったと思うのですけど。数学がなくなっている。

（笠原委員）

今申し上げましたとおり、管理栄養士対策という意味からは特に問題ないということと、それから科目が減ることによって、受験生をたくさん、この時期の受験生を確保するという意味です。

（内堀委員）
もし数学の学力をセンター試験で確認するということが必須でなければ、前期でもないほうが多く生徒が集まると思いますが、いかがですか。

（笠原委員）
そこは大変、非常に悩ましいところではあるのですが。

（内堀委員）
数学が結構苦手な子が多い傾向がありまして、数学というものが受験科目にあることによって、結構、抵抗感を示す生徒が多いのではないかなというように思っています。それから文系の国公立大学でも、文系の、特に個別選抜の数学の問題を若干易しくすることによって、受験生を多くしようとしているという話がある大学があります。これはもう正確にはその大学が言っているのではないので、受験業者がそういう分析をしているのですけど、そういったようなことも含めると、もし数学が必ずなければならないものでなければ、希望者も増えますし、むしろ国語や化学や英語の勉強をしっかりやって受ける子は増えますので、そういう点では中期でいいのであれば、前期も同じ形のほうがいいかなというふうには、個人的にはそんな感じは思います。

（笠原委員）
ありがとうございます。入学してすぐに理系の科目がずらっと並んでまいりますので、ということも踏まえていたのですが、今、ご指摘のとおり、それならば前期でも、という、分からなくはないので、まだ時間があるようでしたら検討させていただきます。ありがとうございました。

（安藤委員長）
どうもありがとうございました。それでは、上條委員どうぞ。

（上條委員）
金田一先生の言われた、グローバルマネジメント学部の学校長推薦の選抜のことについての確認なのですが、要するに高等学校長推薦というのは、県内外を問わないわけですよね？それで、来た学生のうち、例えば 30 名のうち 25 名ぐらいは県内から取りたいとおっしゃいましたね。そうすると県外から来た学生に優秀な学生がいても、県内学生の枠を 25 人ぐらい取ると、そういう意味ですか。

（金田一副委員長）
はい、そうです。

（上條委員）
そうですか。

（金田一副委員長）
よろしいでしょうか。

（上條委員）
あと、その県内学生につきましては、もちろん一般選抜でもかなり来ますからね、全体とすれば当然増えると思いますが、あと入学定員のことなのですが、健康発達学部の場合は、厚労省のかなりきついあれがありますから、プラスを取ることは難しいと思うのですけど、グローバルのほうは、1割ぐらいは考えておられるのですか。

（金田一副委員長）
この辺は多分、きちっと採らないと今、文科省的に厳しくなっているということなので、難しいのではないかというふうに思っております。

（徳永副委員長）
先ほどお話がありましたけど、私、実は、県内の各地でこの新しい県立大学の説明会をしたときに、上田地区でも長野地区でも、保護者の願いは、はっきり申し上げてこういう場でどうかと思いますけど、ある程度偏差値を高い大学にしてほしいという、やっぱり望みがあるのですね。
結局は、私もいろいろさまざまな大学のこと等、見てはいますけど、私も今関与している私立大学なんかの新しい学部をつくるときは、一番その大学の中でも高い偏差値の学部を新設にしないと、結局は失敗してしまう。やっぱりいくらつくっても、結局は人気がなくなってきて誰も受験しない、誰でも入れることになってはまずいので、そこは正直言って、入りやすさというよりもやはり保護者の方から、特にやっぱり県内で言われたのは、外に出て行くのは、別に出て行きたくて出て行くわけじゃないので、県内に自分の子どもの実力に見合う大学、いきなり信州大学の次はもうないという状況が問題を招いているわけですから、そこは高等学校のほうのお立場は分かりますけど、やっぱりそこは大学として、いろんなことを考えていく上では、ある程度レベルを少し、やや高めに設定するということをしない限り、結局はやっぱり長続きしなくなってくる。
それは本当に多くのところでは、経営上の問題になりますので、そこはそことして、お立場なりご意見としては当然あるかもしれませんが、私は大学の経営という立場ではぜひそこのところは、ご賢察いただければと思います。
私の意見として、これまでの状況を踏まえた形できちっとかなりご検討いただいたという

ことについては、大変皆様ご苦労いただいたって思っていますが、若干、平成30年に開学するということで、先ほども金田一先生のほうからこれからさらにまた検討しますということであったものですから、ちょっとそういう検討要素の中に加えていただきたいと思いますのは、一応まだそんなに数は出ないとは思いますけど、文部科学省のほうでは、IB について日本語版のIBであっても、全国に200校とかつくるということを言っています。

例えば筑波大学は現に附属高校は２校で、IB。あとは広島大学とかさまざまな形で、いわば本当の英語のIBなのか、そこに日本語を加えて日本語IBなのかはやや分かりませんが、特に国立大学のかなり有力と言われている大学でも、既にIBスコアだけで入学させるというようなことも、入学させる場合少し中に入れておりますので、だからなかなか書き方としては難しいのですけど、例えば今後、これはご検討ですけど、ここで外国語を全部必須にしておりますけど、例えばそういう中で、大学入試センター試験の英語と、あるいは一定のIBスコア、もちろんスコアにもよりますけど、やっぱりIBスコアが一定のものについては、例えば大学入試センター試験の英語を受けてなくても、もっと高いIBスコアがあればそれで十分英語はわかりますよね。全体について、今後IBスコア、日本語IBスコア、フランスのバカロレアとか、ドイツのアビトゥアというよりむしろ日本としては、これから日本語IBを含めてIBの活躍がかなり増えてきますので、そこのところをもうちょっと全体に、いわば大学入試センター試験の英語の代わりになるものなのかどうかということを含めて、一定のスコアをどう要求するのかということをご検討いただければと。

あとは質問なのですが、小論文というのが沢山ありまして、結構小論文というのもイメージがありまして、いわば感想文程度のような小論文を課しているところもありますが、一方で慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスの小論文はとてつもなく難しいので、ああいうことをイメージされているのなら、金田一先生としてはここで入試問題の解説をするわけにはいきませんでしょうけど、一体どの程度の小論文ということをイメージされているのか、ちょっとそこのお考えをお聞かせいただければと思いますね。

（安藤委員長）

金田一先生どうぞ。

（金田一副委員長）

ありがとうございます。すいません、IB についてまだ勉強不足でよく分かってない面がございます。ぜひこれから勉強して検討させていただきたいと思います。

小論文につきましては、この小論文のやり方についてですけど、いろんなやり方があるかと思っております。残念ながらまだ合意事項になっておりません。学部によっても考え方が違っておりまして、専門的なものを、知識も含めた小論文ということを言ってらっしゃる方もありまして、この辺り、ただ小論文、例えば中期日程ですと小論文しか課さないということがございます。ですので、かなり総合的な能力が分かるような小論文にしたいということ

は考えております。

しかしそのためにどういう小論文かというのは難しく、SFC は前もって小論文を出してくるという形でやりますので、そこに面接を加えて小論文を見るという形になっております。うちはそうではなくて、その場で書かせる小論文になります。その点は SFC のような形ではございません。ただ、一応総合的な能力を量れるような形にしたいということで、すいません、細かいところ詰めておりませんけど、これから検討させていただきたいと思います。

（安藤委員長）

どうもありがとうございました。私は今、徳永副委員長からやっぱりこの新しい大学はレベルを高く保つべきだっていうのは非常に素晴らしい援護射撃をいただいたと思っていまして。まさにそういう、例えば海外で留学生が来ようと思えば、レベルの低いところに来るわけがないわけですので、その点でも本当に大学の標榜する理念を実現しようと思うと、やっぱりこれは信州大学にも匹敵するレベルの高い学力を持った生徒を、たくさん集めたいというふうに思っておりますので、今日はご意見ありがとうございました。

（森本委員）

グローバルマネジメント学部は、前期を 70 名、中期を 60 名にいたしました。この意図は、前期に全部採ってしまうというと、国公立に受験する人は大体本学にあまり受験しないと思います。ですから、そういう意味で前期を少なめにして、それを中期に、主に国立大学を残念ながら落ちた方をそこで入れようということで。というのは、これは、全体的な偏差値を 55 以上にしようという意図であります。

それで信州大学には、残念ながら経営学科がないのですね。経済と法律しかないのです。ですから、長野県内にはやはり経営を学びたいっていう人は、多数いらっしゃると思うのですね。そういう人たちをここの県内に全て吸収しようということで、あえてこういう中期 60 名という、これも小論文だけで受験できるというそういう形にさせていただいて、ここでは優秀な人たちを全て、こう言ってはなんですが、刈り取るというつもりで配置しております。という意味で、レベルの高い大学を一応目指しております。

（安藤委員長）

それでは宮原課長。

（宮原課長）

すいません。健康発達学部の食健康学科の受験科目の点について、先ほどちょっと内堀委員からお話があって、笠原先生にお話をいただきました。これまでの入学者選抜専門部会での議論では、前期試験というのは基本的にはやはりこの学部、数学も必要であろうというのが基本にございます。例えば今現在の長野県短期大学の健康栄養専攻も、数学を課してござ

いまして、数学というのは基本的にはやはり必要だろうと。ただ先ほど笠原先生からもお話ございましたとおり、最終的に国家試験対策としては、入学後にこの部分を補うことが、数学の場合はできないわけではないという中で、比較的中期の日程については、３人だけの募集枠でございます。

そういう中で、併願者で他の大学との併願の関係でどうしても、理系・文系という区分が果たしていいのかどうかというのがありますが、文系で数学を受験されない方でも、この３名の枠であれば非常に優秀な方を採れる可能性もあるだろうと、そういった議論でこの形にさせていただいておるところでございます。

もしできましたら、高校２年生が既にもう第１期の対象者でございますので、なるべく早く受験科目につきましては、公表・周知を図ってまいりたいというふうに思っているところでございまして、もしできましたらこの場で、この点についてはご決定をいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

（金田一副委員長）

すいません、私からも。多分この形でやるということで確かずっと進んできまして、できたら前期には数学を入れる、後期は数学なしという形でぜひここでお認めをいただきたいというふうに思っており、先ほど笠原先生、もう少し考えましょうという意見がありましたけど、ぜひここでこの形でいきたいということです。やはり県内の私立大学やなんかと差別化も図りたいということもございまして、いろいろなことからこういう形に決めさせていただいたということがございますので、その点はご理解いただきたいということでございます。

（笠原委員）

中身は変わらないのですけれど、表現の仕方として、今、内堀先生のお話を伺いまして、むしろ数学を残しておいて、数学・理科で左記から１というこども学科の表記の仕方にすれば、恐らく数学が必要でないというイメージは払拭されて、なおかつ選ぶのは理科の科目を選ぶ人が多いという可能性は高いのですけれど、左記から１を、数学と理科合わせて１に変えていくという方法もいかがなものかというふうに考えましたが、どうでしょう。中身は変わらないのです。実質的には変わらないのですが、表記の仕方として、そういう誤解を招くのであれば、そうですね。そこが問題ですね。理科は学んでいてほしい、そうですね。理科は最低限。どちらを優先するかというと理科のほうを優先科目とするので、申し訳ありません。

（安藤委員長）

はい、内堀先生。

（内堀委員）

確認したかったのは、数学っていうものをセンター試験で課す必要があるかどうかっていう確認なので、必要があれば、当然やらないと入学後大変なのは見えますので、ただ一方で、それほどということであれば、数学の苦手意識を持っている生徒が、特にこの学科を希望するであろう子たちに多いっていうことも想定されるので、外せるものなら外せば、他の国語とか理科とか英語を一生懸命やってきた子が、当然科目が減れば、重点的に他の科目できますので、という可能性があるという意味でお聞きしただけで、いろいろ言うことではないと思っていますので。

（安藤委員長）

ありがとうございました。それではこの形で行くということで、ご理解いただくよう、よろしくお願いいたします。それではいろいろ意見いただきましたけど、この入学者選抜の内容は恐らく高校生やご家族、学校関係者が一番関心の高いところだと思いますので、できるだけ早く発表するということですよね。ですから今回これで決定ということで、今後は広報活動に積極的に力を入れていきまして、広くあまねく高校生の方に公表したいという活動に移っていきたいと思います。

ということで次の議題に移らせていただきたいと思います。第６、『新県立大学設置に関するアンケート調査結果について』でございます。まず事務局から説明をお願いします。

（宮原課長）

資料 6-1、『新県立大学設置に関するアンケート調査結果について』でございます。このアンケートは本年 10 月に予定をしております、大学設置認可申請に添付する学生確保の見通し等を記載した書面の作成を行うために実施をしたものでございます。アンケートは２種類ございまして、一つは高校生への入学意向調査でございます。

２番の所をご覧いただければと思います。調査は本年の１月から３月にかけまして、県内高校１年生全員を対象に実施をさせていただき、９割近いご回答をいただきました。新県立大学への入学希望につきましては、下の（2）の所でございますが、定員 240 名に対して、『入学を希望する 186 名』、『受験先の候補の一つとして考える 1,395 名』ということでございます。合計 1,581 名は、高校生の中の大学進学希望者 9,664 名の 16.3 パーセントに該当するという結果でございます。

一方で、『入学を希望しない』、『分からない』というのがそれぞれまだ４割ございます。特に『分からない』という方がこれだけおられますので、今後さらに本学の PR 等行うことによりまして、入学希望者を増やしていくことが必要になってくるのかなというふうに考えてございます。

この数字を学部別に見てみますと、『候補の一つとして考える』という方まで含めた 1,581 名のうち、54 パーセントの方がグローバルマネジメント、この資料上は当時総合マネジメント学部としておりましたので、その名前になっておりますが、この学部の希望者というこ

とでございます。次のページをご覧いただければと思いますが、参考の（2)、先ほども上條先生からお話のあったところでございますが、『入学を希望する』というＡの所だけの数字を見ますと、84 名となっておりまして、グローバルマネジメント学部の魅力が、まだ十分に伝えられていないのではないかなというふうに感じているところでございます。

（3）にもちょっと記載をしてございますが、アンケートには自由記入欄を設けてございまして、ここに簡単に記載をさせていただきましたが、新大学に期待をいただいている記載等が多数ございました一方で、『１年次の全寮制の意味が分からない』、つまり希望者以外も寮に入るのはなぜなのかといったような点、それから海外プログラムで海外に行けるのは良いけれど、具体的にそこでどんなことを取り組むのかといったような点、それからグローバルマネジメント学部とは、どんなことを学んでどんな進路につながる学部なのかといったような点についてのご意見をいただいところでございます。

これらの点については、今後の広報活動にあたって、力を入れて情報発信の充実に努めてまいりたいというふうに考えているところでございます。

3、『企業・団体等への採用意向調査』という所、いわば大学からの出口に関する調査でございます。県内の企業・事業所様から、本学の学部学科構成を踏まえながら、2,000 事業所にアンケートをお願いしました。44 パーセントの回答をいただいております。この学校の卒業生の採用意向についてお伺いしたところ、グローバルマネジメント学部で定員 170 人に対して、『積極的に採用したい』、『一応採用を考える』という所まで入れますと、278 事業所から回答をいただいております。

定員 30 名の食健康学科、右側にございますが、につきましては 153 事業所、定員 40 名のこども学科につきましては、122 事業所から同様の回答をいただいているところでございます。

その後ろ、資料 6-2 という所にこのアンケート調査結果のさらに詳細な調査結果をお配りしてございます。ちょっと厚いものでございますので、簡単に２、３点だけ紹介をさせていただきたいと思います。資料の 10 ページを開いていただきたいと思います。ここは高校生に対するアンケートでございます。県立大学に入学を希望される理由というのを伺っております。『県内にできる公立大学だから』という所が、比較的多くの部分を占めているように見られます。また 11 ページでは、学生さんがどんな点に関心があるのかというところを伺いますと、下のほうほど関心が高いところというところになりますが、やはり『就職・進学』、それから『資格・免許の取得』といった点に関心の高さが伺えるところでございます。

これと併せて 18 ページをご覧いただきたいと思います。18 ページは、企業側、事業所側のアンケートの結果の部分でございますが、ここでは採用したい、採用を考えるという事業所数だけではなくて、その人数も伺っております。先ほどの事業所数よりは、もう少し人数ベースでいきますと増える形になろうかと思います。

食健康学科、こども学科の採用も十分見込める結果となっておりますけど、グローバルマネジメント学科についての採用意欲につきましては、他の学科に比べても高いという分析が

ここでは、委託業者によって実はされているところでございます。食健康学科、こども学科につきましては、長野県短期大学の卒業生が築いてきていただいた信頼や実績が、大きく影響しているのかなというふうにも思っておりますが、企業側が関心を寄せる人材像について、21 ページがございます。

ここの 21 ページの冒頭のコメント等も含めて見ますと、企業側・事業所さん側の、グローバルマネジメント学科にお寄せいただいている期待が、かなり高いのかなというようなふうに見て取ることができるかと思います。先ほどの高校生のほうで、就職状況等に強い関心があるというところも踏まえますと、本学のグローバルマネジメント学科が、企業側から見れば、こういった大きな期待をいただいているといったような点も今後、高校生側に十分 PR をしていけば、また選択の範囲に入れていただけるのかなというようなことを考えてございます。

今回のアンケートの実施にあたりましては、県の教育委員会、それから高等学校の皆様、それから県の経営者協会をはじめとする経済団体の皆様に、大変なご協力をいただきました。大変ありがたく感じているところでございます。説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いします。

（安藤委員長）

どうもありがとうございました。それではここで、このアンケートに関しまして、ご感想とか、ぜひいただきたいと思いますけど、企業を代表しまして山浦委員から何かございますでしょうか。

（山浦委員）

長野県は製造業が多いものですから、どちらかというと技術を持った工学部とかああいうところのニーズは非常に高いですよね。そうは言ってもこういうグローバルなマネジメント、セールスも当然要ります。ところが信州大学みたいな独立大学法人は、中央の国立大学に文科系を任せて廃止するという方向なわけですよね。

信大さんも経法学部つくって今度一つの学部になったわけで、やはり地元のこういった学問をきちんとやっていただけると、かなりニーズが高い。この頃、労働基準監督署でメンタルへの配慮が義務付けられているのですよね。現にものすごい人がメンタル病になっています。私は銀行なもので、銀行にも多いのですね。精神力をきちんと鍛えてもらうようなことをしておいていただかないと、非常に困るわけでありまして。これは大学だけの問題じゃなくて、やはり社会問題になっているわけですよね。ですから、これはもう家庭教育から始まっていると私は思っているのですけど、やっぱり我慢のできるような教育を、きちんと各層がやっていただくというようなことが重要と思っております。

もうひとつ、出口の問題っていうのが、私はちょっと気になっておりましてですね。出口をどの程度厳しくやるか。ここがやっぱり今後非常に、逆に言えば、特色を一番出せるとこ

ろではないかというふうに思っているのです。出口をきちんと、例えばグローバルだからもうTOEICは何点以上とらなきゃ卒業させません、くらいのことをやるかどうかというようなことです。

あと資格を取れるところは、資格をきちんと取ること。こういった資格が医学部なんかランキングが出ているわけですね、国家試験何人受かったと。もう全然受からない、２割しか受からないような大学もあったりするのですけど、こういうものもまたランキングが出てくるのかどうか私は分かりませんけども、その辺の出口も、きちんとどういったレベルを出すのかというようなことを、ご検討されておったほうがいいのではないかという気がいたします。よろしくお願いいたします。

（安藤委員長）

どうもありがとうございます。その辺に関してどうですか、金田一先生。これはわが校の特長かと思うのですけど、出口に関するところで。

（金田一副委員長）

１年次と３年次に、例えばTOEICを強制的に受けさせて、この大学が本当にちゃんと英語力なら英語力が伸びたかどうかということを、客観的に見せられるような形にしていきたいなというふうに考えております。それだけではなく、資格の問題、非常に重要だと思っておりますので、私は「厳しい教育をする大学にしたい」ということを言っております。ただあまりそればっかり言うと高校生が来てくれませんので、身に付く教育というふうに言い方を変えておりますけど、ぜひそういうような形で頑張っていきたいと思います。

それから精神力につきましても、これは僕が来る前の基本構想のときにこの全寮制というのがございました。せっかく寮に入って親元を離れるのであれば、この１年間をぜひいい教育の場にしたい。単に授業するのではなく、先輩、県内にいらっしゃる素晴らしい一流の方々等に来ていただいて、夜を徹して語り合うような機会をたくさん設けることによって、私は学生たちが、将来自分がどうなりたいとか、またはこういう人間になりたい、こういう生き方をしたいということが出てくるのではないかと思います。ぜひこの全寮制を生かした教育をしていきたいと思いますので、そこでは精神力もぜひ鍛えていきたいと考えております。以上でございます。

（安藤委員長）

どうもありがとうございました。また私のほうから、特に長野県は確かに製造業の比率が高くて、そういう点でうちはエンジニアリングとか工学部系が少ないわけですけど、今の教育がどんどん文科系、理科系っていう枠がなくなってきていまして、特にIT関係とかソフトなにというのは、これはもう特に何も理科系だからコンピューターサイエンスでもないので、そういう点でもわが校にもいろいろ既にIT関係からいろいろな接触がありますけど、

そういうITに強い、今後ソフト・サービス、それからIT、通信とか、そちらのほうに強い人材っていうのは十分わが校でも輩出できるのではないかというふうに思っていますので、これもぜひそちらのほうでもレベルの高い大学でというふうに目指したいということでございます。

他にどなたかご意見あれば。はい、どうぞ上條先生。

（上條委員）

今日全然出なかったので。健康社会マネジメントプログラムの帰趨について、ちょっとどんなふうになっているのかお聞きしたいと思っています。

（安藤委員長）

はい、では宮原課長、お願いします。

（宮原課長）

健康社会マネジメントプログラムにつきましては、両学部がちょうどこのマネジメントと健康発達という両学部側の大学の特長の一つとして、ぜひ充実をさせていきたいというふうに考えております。当初の健康社会マネジメントプログラムの発想のところには、ある程度そういった分野で、またビジネスを起こしていくような方というようなところがございましたので、今回この議題で出させていただいております、アントレプレナーコースみたいなものとの関係を今、再調整をしてございます。

それとこの健康のマネジメントという両分野にまたがるところをつないでいただくような先生を、どんなふうに確保していくのかというところを今、ちょうど調整をしているところでございまして、もう少しお時間をいただければ、充実したものを出させていただきたいと思います。

（安藤委員長）

ありがとうございました。それでは最後の報告でございます。施設設備の整備状況について、進捗状況について報告させていただきたいと思います。それでは、事務局のほうから説明をお願いします。

（事務局）

施設班の西澤です。資料７に基づき、報告させていただきます。資料７をご覧いただきまして、手短に前回の報告以降の状況につきましてご説明申し上げます。

まず、三輪キャンパスにつきましては、前回、建築、空調設備、電力設備の３工事の発注について報告させていただきましたが、残る弱電設備、衛生設備工事につきましても、他の工事と同じく平成29年11月30日までを工期とし、それぞれ本年３月22日に契約いたしま

した。この施工業者が全て決定したことを受けまして、３月 24 日に地区住民を対象としました工事説明会を行い、今年度に入りまして４月９日に施工者主催の安全祈願祭、それから県主催の起工式を経まして、無事着工を迎えております。

資料中ほどにございますとおり、６月３日現在、直径１メートルほどの柱状の地盤改良、1,360 本ほどを完了しておりまして、さらに施設中心部の基礎工事、地下１階となりますアリーナの山留工事、ユニットごとの部工事を施工中でございます。

続きまして、２ページ、こちらにございますとおり、後町キャンパスにつきましては、実施設計完了と発注準備を進めているとの報告を前回させていただいております。建築工事につきましては平成 29 年 10 月 23 日までを工期に、本年５月 20 日付けで仮契約を結んでおります。この本契約につきましては、県議会、この６月定例会にご審議いただく予定となっております。

残る４工事、空調設備、電力設備、弱電設備、衛生設備、これにつきましても、現在公告中でございまして、今月下旬に開札、７月には契約する予定となってございます。７月５日は地域住民を対象としました工事説明会を予定しております。施設整備につきましては両キャンパスともに、現在のところ、最後にお示ししてございますスケジュールどおり進捗している状況でございますが、今後工事が本格化していきますため、平成 30 年度の開学に向けた、着実な工程管理に心がけてまいります。説明は簡単でございますが以上でございます。

（安藤委員長）

ありがとうございました。設備の進捗状況につきましてどなたかご意見というかご質問等あればこの機会に受けたいと思いますけども。予定どおり順調に進捗しているという理解でございます。

それでは本日の議題はこれで全て終了いたしましたけど、最後に全体を通しまして委員の皆様方からもし何かご意見、あるいはご質問等ありましたら、お願いしたいと思います。どなたかせっかくの機会ですのでもしございましたら。

特にご意見がないようですので。今日は大変盛りだくさんに皆さん闊達にご意見いただきましてどうもありがとうございました。

それではこれをもちまして、今日の設立委員会を全て終了したいと思います。どうもありがとうございました。

（事務局）

安藤委員長、議事の進行、誠にありがとうございました。また委員の皆様におかれましても、長時間熱心なご議論をいただきまして、誠にありがとうございました。次回の設立委員会の日程調整につきましては、また改めてさせていただきたいかと思います。それでは以上をもちまして、第７回の県立大学設立委員会を閉じさせていただきます。誠にありがとうございました。

（安藤委員長）

どうもありがとうございました。

（以上）